

ムラびと参画による 山岳地域の活性化

—山村安家（アッカ）を事例に—

齊木 崇人

この研究報告は、岩手県北上山系の山村、安家（アッカ）を対象にして、現代の山村社会がかかえる諸問題とその構造を文明生態史的にとらえ、ムラびとと参画による、問題解決型ムラづくりの方途を模索した環境計画的な研究である。

1. 研究の目的と背景

人口の急増化、産業社会化など近代化の直接、間接の衝撃により、世界の山岳地域は過疎問題をともしつつ伝統文化の急激な解体と、環境破壊の危機に追いつまれている。いいかえれば、伝統文化を含む生態系の崩壊である。

本研究では、このような山岳地域の活性化の道をさぐるものである。

2. 研究対象地—安家の現況

2.1 過疎のムラ

安家地区は岩手県の東北部にある岩泉町の中のムラ（旧村）であり、安家川流域の北上山地の山村である。町の中心である岩泉から約20km離れ、戸数411戸、人口1641人、若者の人口流出に悩む典型的な過疎のムラである。（図1、図2）

2.2 自然と一体となった人々の暮らし

北上山地の落葉広葉樹雑木林と、急峻地というきびしい自然の中で、山間のわずかな土地を利用

した多品目の畑作、日本短角種の夏山冬里方式という牛飼いで、特にムラの7割を占める国有林の山仕事に頼って生きてきた。これら3つの農・牧・林をうまく複合させた生業の仕組みをもちつづけている。ブナ、ミズナラ、トチ、クルミ等の雑木林の中で、樹木、堅果、山菜、きのこ類の利用、牛やクマ、カモシカ等とのつき合いは、土地柄をいかした多角的で自然と調和した合理性をもっていると評価されている。ムラ人の連帯的な小さな単

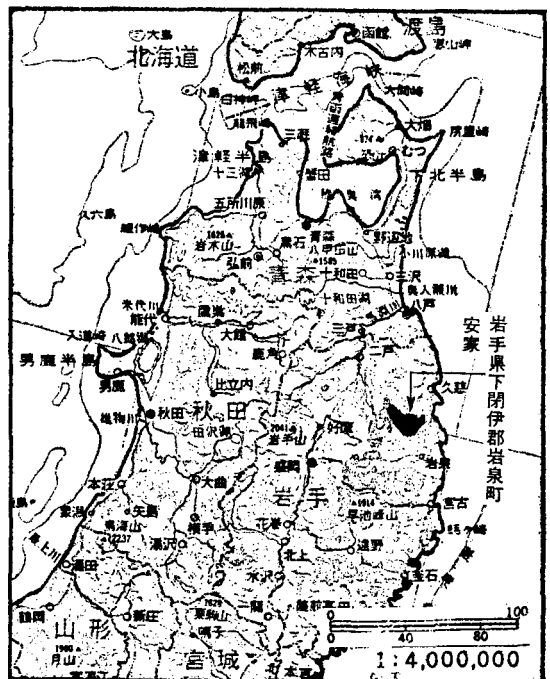


図1 位置図（その1）

さいき たかひと 筑波大学 環境科学研究科

位の組織「ゆいこ」により、人々は助けあって暮してきた。ムラには、人、文化、自然が渾然一体となった考え方や生き方が根底にあった。

2.3 ムラの資源と働く場

ムラの東側を南北に縦断して、巨大な「安家石灰岩帯」が走っている。ここには安家洞など数多くの鐘乳洞、カルスト地形が雑木林や草地の下でほとんど未利用のまま眠っている。岩手県の学術調査によると、その規模と価値は全国的にもすばらしいものだと言われている。

昔ながらのこのムラの環境や生活も、最近の国有林の拡大造林や北上山系大規模畜産開発により今や大きく変わろうとしている。たとえば国有林の拡大造林が急激に進み、伐る木がなくなり、山仕事からの収入が持続的には期待できなくなっている。そこで食いつなぎのために、眠っている石灰岩の採掘を考えたのだが、環境保全の見地から、県によりこの計画は凍結された。ムラ人たちは国とムラのはざまの中で、とまどいと不安を感じている。安家が大好きな若者たちは、ムラに帰りたいたいが、働く場がないというわけである。

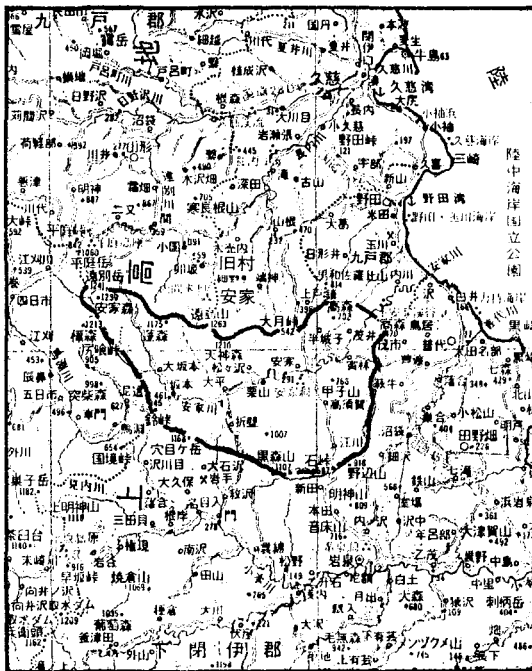


図 2 位置図 (その 2)

3. ムラづくりの経緯と実績

このようなムラの環境変化の中で「生態系把握と住民参画にもとづく山岳諸地域の活性化に関する比較研究」(文部省科学研究費一般A, 研究代表者川喜田二郎)と題し、1979年以降5年間にわたり、安家地域の高密度の生態史的調査を実施してきた。その結果、自然と社会と文化の関連の網の目を、まず文化を含む生態系のパターンとしてとらえ、それらを図化した。さらに、この文化生態系を歴史的・地理的動態の中で構造機能的にとらえた。このことを契機として、ムラ人たちが自身で自分たちのことを考えようとする以下のような模索がはじまった。

3.1 学習を通じた住民の活性化

1980年には「安家大学」というムラ人の学習組織をつくり、7つのテーマをめぐって「額に汗して明日の安家を考える」住民全体の活性化がはじまった。ムラ人が選んだ学習課題は、a. 安家の産業・雑木林をどう使うか。b. 安家の産業・短角牛とともに生きる。c. 人間と自然・道具との調和と使いこなし。d. すばらしさを次代に伝える安家の教育。e. 人々の協力と人材を求める安家の生きる姿勢。f. 安家の共同組織。g. 結婚の和合と後継。であった。現在は安家大学同窓会となり、毎年継続されている。

3.2 ムラ連合の促進

1981年には、活性化されたムラづくりをめざしそれぞれムラづくり、マチづくりに挑戦している岩手県下の10カ市町村の代表を安家に集め、ムラ人たちが手づくりで「安家会議」(シンポジウム)を成功裏に開催し、他市町村の具体事例を学習した。この結果、それぞれの市町村間の交流がはじまり、新たな展開を見ている。また、安家会議のつづきを各市町村もち回りで企画準備中である。

3.3 活性化の歩みを記録映画化

研究者とムラ人の合作による地域活性化の歩みを、16mmムービーで記録映画専門家と提携して、

取材完了まぢかい。

3.4 実績の評価と課題

これらの実績は、地元岩手県だけでなく、同じ問題意識をもつ各方面の人々から注目されつつある。その背景には〈住民と研究者の連携〉、すなわち、安家住民および岩泉町と筑波大学研究チームとの結びつきが理想的に成長しつつあることである。

さらにつけ加えるならば、近代化によってとり残され、解体されつつある僻地を活性化することは、現代国際社会にとって重要課題であるという認識も〈僻地活性化は国際的課題〉として定着しつつあるといえる。

4. ムラびと参画によるムラづくりとその手法

上記の実績が地元で認められるなかで、農業構造改善のコンサルタントが依頼された。そこで、このコンサルティングを機会に参画型ムラづくりの展開を試みた。以下その実践報告となる。

4.1 ムラづくりは360°の視野からの意見で

安家地区の生活環境改善は、自然と社会と文化の関連の網の目をとらえ、安家の総合的な問題把握からはじめなければならない。

これは、一般的な生活問題にとどまらず、生産活動、社会活動、文化歴史活動の中での関係性を把握しつつ進められなければならないということである。

4.2 集落単位の懇談会の開催

そこで私たちは、安家11集落(図3)でそれぞれ、今までの調査蓄積を紹介しつつ「安家ムラづくり、〇〇部落の課題」と称した懇談会を開催した。ここでは新農構にとどまらない広範囲な角度から、また自由奔放に意見を集め、その結果を各集落の人々とKJ法によってまとめた(1983年1月)。さらにそのまとめられた図解を報告しつつ、

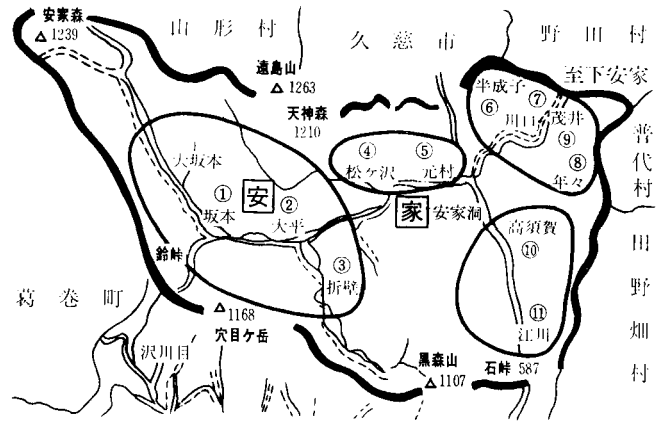


図3 安家11集落の位置図

行政の方々をかこんだ懇談会を開き、住民投票による課題の選択を行なった。この投票は衆目評価法といい、参加者が重要と考える上位5課題を選択し、それに上位から5点、4点、3点、2点、1点と点数を与えるものである。また即日開票し目の前で講評を加え、それまでの考えと集計結果のズンをも確認した。さらに、その図解と結果は各集落の公民館に掲示され、不参加の人々の目にもふれることになったのである。

4.3 衆目評価と各集落がかかえる課題

衆目評価によって選択された課題は、各集落によって異なる。この課題の中には、新農構実現後も継続し、解決の道を求めなければならないものも含まれている。

11集落の住民がそれぞれ選定した生の課題の中から、坂本地区をとりあげ紹介する。左の数字は投票した点数の総計であり、内容については問題提起の課題から解決案までの幅があるといえる。さらにこの課題を最高点から最低点のあいだを等分し、A~Eまでの5段階に評価し、各集落の優先課題の組合せも考慮可能としている。(表1)

5. 衆目評価結果のまとめ

—各集落のかかえる選択課題—

各集落の選択された衆目評価結果をさらに集約すると、図4のインデックス図解のようになる。

〈生きる〉

何よりも仕事の確保と有効な組合せに関心があ
り、自給自足をも含めた生きていく自覚が必要で
ある。

〈人を求める〉

医者・嫁・指導者が不足している。

〈場づくり〉

まずは集まりの場がほしい。さらに学習の場も
ほしいとして、共同化や共同作業のすすめも希望
しつつ、良好な行政指導の場づくりも望んでいる
といえる。

〈活用と新しい工夫〉

豊かな安家の自然を守りつつ、未利用地の活用
や、多くの潜在資源の有効利用を望んでいる。さ

らに、安家のよさを外に知らしめると同時に、安
家の産物の流通の手法や機構の工夫が望まれてい
る。そのためには、部落格差を是正しつつ、災害
のない安心できる安家としたい。

〈施設の充実〉

生活道路・生産道路や生活用水・生産用水、さ
らには橋の整備も望んでいる。これに加え、公共
交通の充実も望み、防犯灯の設置、共同アンテナ
の設置も希望している。また子供の遊び場やスポ
ーツ施設の充実も望まれているといえよう。

以上が衆目評価のインデックス図解の内容であ
るが、次にこの衆目評価項目を一覧にする。先に
示したA～Eランクを、●～○印にかえ、重みづ
けがひと目でできるようにしている。(表2)

表1 坂本地区の衆目評価一覧表

点数	ランク	課 題
24	A	使っていない土地の開放、住む場所の確保と空地の農地利用を考えたい
24	A	元村の診療所に、いつでも安心して見てもらえる良い医者がほしい
17	B	交通の便が悪いので、せつかく稼いでも半分ぐらいまで交通費で出してしまう
14	C	農畜を営むため、農道そして機械の渡れるだけの橋を作ってもらいたい
13	C	現在は沢水利用の水源地の水の便が非常に悪いので、何軒かでの共有の簡易水道がほしい
11	C	山菜、きのこ、また農作物を現金収入化するために、市場の開拓、水の便を良くすることなどを考える
9	D	仕事がないという深刻な問題を打解するためにも、知恵や労力や基金を出しあい、今できることを少しづつみなどで実行していくことが大事だ
7	D	大坂本のほうも道路を舗装してほしい
6	D	農業、畜産などについての勉強の場、また地域の人が勉強できる場がほしい
5	E	若い人達を研修等に送り出し理解と協力を求め、村づくりにつとめてもらいたい
4	E	地域内に男はもちろん女でも働ける職場がほしい
4	E	将来の子どもたちのことをよく考え、まず現在の自分がいかに真剣にやるべきか心せよ
3	E	テレビのアンテナおよび線を共同でひく
3	E	自然をもっと利用できないものか
3	E	ケンカをしながらもみんなが本気で言いあえるような人間関係、またそんな集まりの場をつくる
3	E	後継ぎ問題があり、特に農家への嫁不足が深刻になっている
2	E	現金収入の道が途絶えてしまうのが不安で、思いきったことができないでいる
2	E	魚をフ化させるため、きれいな川をよごさないでほしい
2	E	魚の養殖、はらの赤いイワナ、かじかなど、やはり名物化したい
2	E	分校に地区内出身者の良い先生がほしい
1	E	地場産業が少なく、林業の見通しもないため、今後収入の道が期待できない
1	E	地元の人には土地にあるものの価値がわかっていないため、金になるものを利用していない
1	E	スポーツができる 体育館 、建物があれば楽しい村にできるのではないかと
1	E	いつでも気軽に集まれる集会場が必要だ
1	E	部落のまとまりのためにもリーダー的人材がほしい
1	E	安家地域内でできるだけ自給自足を確立して、金をよその土地に出さないようにする

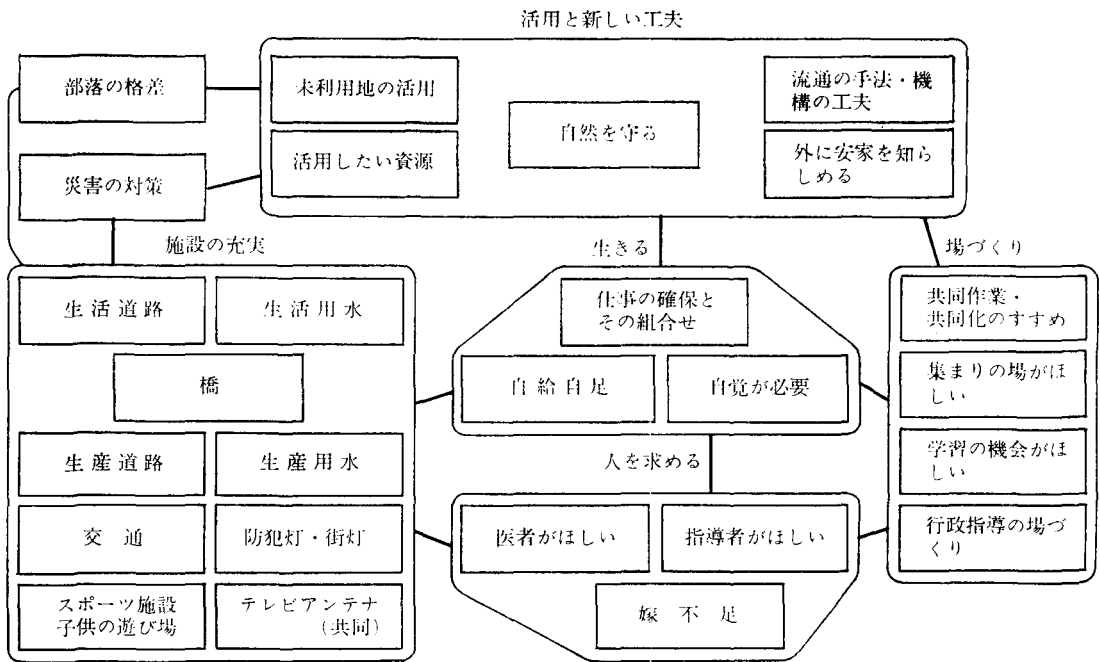


図 4 安家ムラづくり衆目評価結果のインデックス図解

6. 課題特性のパターンと集落別課題

衆目評価で一覧表にされた項目を課題特性座標におきかえたのが、先の一覧表の右端に示したものである。

これは、次の図5に示すように、縦にソフトな課題（活用と工夫・人を求める）を集めた軸をとり、横にハードな課題（施設の充実・場づくり）の軸をとったものである。中心に、生きるという根源的課題をおき、あたかもマンダラのような構成をもつ。

この課題特性をパターン化して各集落を比較検討すると、各集落のかかえる課題が明確になる。これを表3、表4にして次に示した。

これにより、各集落の解決すべき課題で、特に望まれているものが理解される。すべては生きるための仕事と自覚を中心にして何に重点をおきつつ生きていくべきかが明らかになっている。これを〇〇型という表現で集落ごとに以下に示す。

以上の課題特性のパターンを考察すると、安家のムラづくりは、「学習・指導・共同作業の中で、

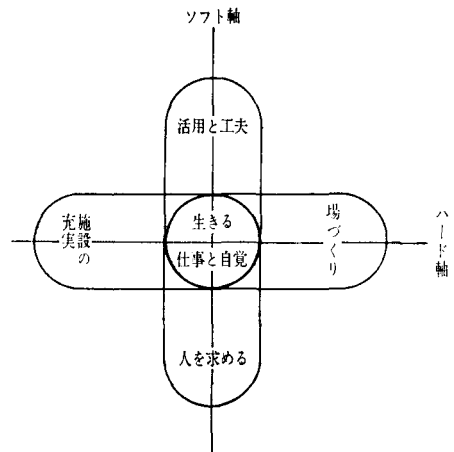


図 5 安家ムラづくり活性化マンダラ

人の育成・確保とあわせ、既存のもの活用の、新たな工夫をすること」が課題といえる。

7. ムラづくりへの挑戦

以上の結果をふまえて、1983年10月28日の中間検討会でまとめられたものが以下の重点課題である。

7.1 新農構を實踐していく心がまえと将来構想

これまでの安家ムラづくりは順調に進んできた

表 2 安家ムラづくり衆目評価結果一覧表

凡例 衆目評価結果を次で表わす。 ランク：A-●・B-○・C-○・D-○・E-●

課題項目 対象集落	人を求める	生きる	活用と新しい工夫	場づくり	施設の充実				その他		課題特性パターン ソフト軸 ハード軸 活用と工夫 場づくり 生きる(生産) 施設の充実 人を求める (安家活性化 マンガラ)		
	嫁不足 医者がほしい 指導者がほしい 自覚が必要	自給自足 仕事の確保と組合せ	活用したい資源 未利用地の活用	自然を守る 外に安家を知らしめる 流通の手法・機構の工夫	道 生活道路 生産道路	水 生活用水 生産用水	橋	交通 スホーツ施設・子供の遊び場	防犯灯・街灯 テレビアンテナ(共同)	災害の対策 部落格差			
大	坂	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	本	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○
平	大	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	折	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○
元	注1)松ヶ沢	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	元村青年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○
	元村婦人部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○
	元村壮年	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○
川	半城子	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	川	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○
	口	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○
江	注2)茂井	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	高須賀	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○
川	江	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

注 1) 松ヶ沢の④はCランク4個を表わす。注 2) 茂井は衆目評価を行なう機会が得られず、課題項目のみを表に示した

表 3 集落別課題の比較一覧

ハード		ソフト		施設の充実	施設の充実と場づくり	場づくり
				○	○○	○
				江川 大平		半城子
工夫と活用	○	高須賀 元村青年				元村壮年
人と活用と工夫を求め	○○	茂井	元村婦人	年々 坂本		折壁
人を求める	○			川口		松ヶ沢

表 4 集落別課題のパターン一覧表

集落名	課題のパターン
坂本	総合型
大平	施設型
折壁	場づくり, 人を求める, 活用型
松ヶ沢	場づくり, 人を求める, 活用型
元村青年	活用型
元村婦人部	施設, 人を求める, 活用型
元村壮年	場づくり, 活用型
半城子	場づくり型
川口	施設, 場, 人を求める型
年々	総合型
茂井	活用, 人を求める型
高須賀	活用型
江川	施設型

が、初期の段階と同様、住民全体がガラス張りである。その全貌を感じられるようにする必要がある。そのためには、整備の中心ともなる氷渡り地区、松林地区（元村）にたいする行政の考えを常にはっきり提案することが望まれ、新農構の実施の流れを常に知らしめる対話の必要性は高い。

また今後の課題として、新農構にとらわれず、各村落単位で永年策をつくり、今回の事業に乗れない事業課題も考えていくべきであり、あわせて横のスクラムとして、安家住民・岩泉町役場安家支所・筑波大学の合体で安家ムラづくり協議会を発足させよう。すなわち、地固めとあわせて新農構をきっかけにした将来展望が望まれるものである。

7.2 各集落で総合的に検討された集まりの場や、水対策が必要

集出荷施設を各集落の学習・指導・共同作業の要としつつも、多階層が多目的で集える場、文化施設としてもとらえ直すべきである。

そのためには、安家らしさ、各部落らしさとあわせて、魅力あり集まる気をおこさせるデザインであることは重要である。

次に、安家の水資源は再評価されなければならない。簡易水道設置にあたり、取水方法から排水処理にいたるまでのトータルな研究と対策が必要とされる。と同時に、水組合等のソフト・ハード

両面で、安家川のことまで総合的に考える必要がある。

7.3 安家の資源を生かすための学習研修の場づくり

新農業構造改善センターとして、安家住民が野良着で土をつけたまま気軽に集まれる場とする。

ここでは、実験実習農場として、また大理石・木その他の加工技術を実際に試みしてみる勉強の場が提供される。あわせて、安家における農業経営の理想像を考え、そこから勉強の課目を割り出し、カリキュラムを組む“ムラづくり方法論”の講座を設ける。

すなわち、この研修所を山地利用のバイオニア的活動のメッカとする。

さらに、安家の博物館・資料館としての役割をもたせつつ、安家新農構の実践史もあわせて展示する。これによって安家ムラづくりの変遷を一目瞭然とし、将来への礎とする。

また、この施設は安家の特色を生かし、暖房の工夫(オンドル式等)、太陽熱を利用した風呂等が考えられる。さらに、300人程度の人々が集まれ、冠婚葬祭の場として多目的利用できることも必要である。

以上の内容を具体化していくうえでも、このセンターの経営は重要課題となる。初代所長には

経営のエキスパートを任命し、黒字経営をめざすべきであり、農閑期には住民用講座を設け、多忙時には貸座敷業にてPRすることも可能である。

最後に、農村広場は安家の豊かな自然や田園を楽しめる場とし、遊歩道による学習観光の場を安家の目玉とする。ここでは、安家の樹木・野草・山草・薬草等を観察でき、牛飼養・しいたけ栽培・養魚場をも含め、安家住民の安家再発見・学習の場として位置づける。

なお、1984年度からの新農構実施の足がかりとして、地元の人々が気軽に集える「山小屋プロジェクト」が実施されている。安家の人々の総意により、生活環境改善部会の中で生まれた山小屋建設部会との連携で資金を集め、土地を確保し、間伐材や、雪折れ材を集め丸太材（スギ・カラマツ・クリ）を寄付しあい、老人会は丸太材の皮むき、婦人会はたき出し、青年会は肉体労働、壮年会は技術の提供、子供たちは敷地の下刈り、等の労働力奉仕により完成し、そのデザインと工法も含め注目されている。（写真1）

おわりに

この報告は、新しい学問領域である環境科学研究の具体的な模索の結果である。長期の住み込み型フィールドワークを実施することによって、山村「安家」がかかえる現代的諸問題を明らかにしムラびとと研究者が連携して地域活性化の方途をさぐるという姿勢を核として進めてきた。それゆえ今後も、ムラびととともに問題解決型の手法をみがきつつ、ムラづくりを持続していくことは、いうまでもない課題となる。

この研究の特徴のひとつは、これまで後進地とされてきた東北山村を、独自の文化生態系の理論に支えられた地域であることをとらえ直した点にある。

また、地域の活性化という実践的課題を主軸と

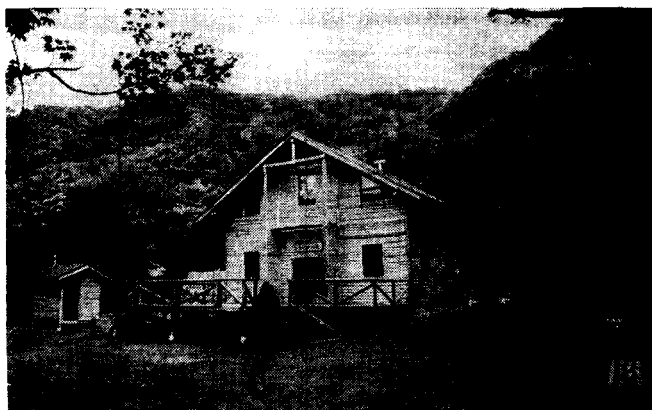


写真1 安家の山小屋

して展開してきたこの研究は、伝統と近代化のはざままで悩みつつ「地域づくり」にいどむ全国の地域社会にたいして、新たな視野と方法を提示するものとなれば、と願うものである。

引用論文

- [1] 川喜田二郎，齊木崇人，他：「生態系把握と住民参画に基づく山岳諸地域の活性化に関する比較研究」研究ノート1，文部省科研費一般A，1980.7，筑波大学大学院環境科学研究科
- [2] 川喜田二郎，齊木崇人，他：「生態系把握と住民参画に基づく山岳諸地域の活性化に関する比較研究」研究ノート2，（安家大学）文部省科研費一般A，1981.3，筑波大学大学院環境科学科
- [3] 川喜田二郎，齊木崇人，他：「生態系把握と住民参画に基づく山岳諸地域の活性化に関する比較研究」研究ノート3，（安家会議）文部省科研費一般A，1982.7，筑波大学大学院環境科学科
- [4] 辰巳修三，川喜田二郎，齊木崇人，他：「流域文化の成立と定住様式の変遷に関する文明生態史的研究」北上川流域を中心とする総合調査報告書。筑波大学特別プロジェクト研究，1979.7，筑波大学大学院環境科学科